

(研究ノート)

## 平穏な日常を希求する—シェイマス・ヒーニーの “Funeral Rites”と“Casualty”

園 田 暁 子

戦争によって普通の人の普通の生活が奪われるニュースを目にするたびに思い出す詩がある。北アイルランド出身の詩人、シェイマス・ヒーニー (Seamus Heaney, 1939-2013) の作品である。ヒーニーの場合は、厳密には戦争ではないが、The Troubles と呼ばれる、1960年代後半から30年ほど続いた、アイルランド紛争が激化した時代に、それまで当たり前と思っていた生活が奪われ、時には死者の葬儀すらまともに行えない状況が続くアイルランドの状況を背景に多くの詩を書いた。本稿では、そのような詩の中から、“Funeral Rites”と“Casualty”を取り上げ、身近な者の死とその弔いについてヒーニーがどのように捉えているか明らかにしたい。葬儀は、その集団の大小の違いはあれども、集団によって営まれるものであるため、ヒーニーが詩に描く葬儀の姿から、個人と他者との連帯のあり方について彼が作品を通して発しているメッセージについてもすくい取りたい。

“Funeral Rites”と“Casualty”は、1972年1月30日に起きた血の日曜日事件に触発されて書かれた。イギリス軍は1969年夏からベルファストとデリーに駐留していたが、1971年には令状無しの拘留が可能となり、この年には1500人以上が拘留されたという。<sup>1</sup>このような状況に対するアイルランドのカトリックを中心とするナショナリストの反感は高まっていった。そんな中、ロンドンデリーでデモ行進を行っていた非武装の市民が、イギリス軍の落下傘部隊に襲撃され13名が亡くなるという事件が起こる。これが、血の日曜日事件で、この後、アイルランドにおける紛争はさらに激化していった。“Casualty”の第I部第3連の

PARAS THIRTEEN, the walls said,  
BOGSIDE NIL.

という一節は、まるでスポーツの試合の結果のように、死者を得点化した落書きがあちこちの壁に見られたことを示している。落下傘部隊が13名を殺したのに対し、アイルランドのナショナリストを表す Bogside はまだ誰も殺していない、すなわち0点ということだ。死者はこれにとどまらず、負傷した14名の内の一人が4か月半後に

亡くなり、また、1972年には、480名以上もの人が、紛争の結果亡くなったという。<sup>2</sup> 身近なところで死者が出るという状況の中、死者を従来のやり方で弔いたい、そして、復讐の連鎖を終わりにしたいという心情を表したのが、“Funeral Rites”である。一方、血の日曜日事件の後の外出禁止令中に外出し、爆破の中、命を落とした一人の知人 (Louis O’Neil) について、その人生が投げかける問いと向き合ったのが、“Casualty”である。これらの作品は、彼の代表作に数えられるものの、“Digging,” “Personal Helicon,” “Blackberry Picking”や“Punishment”ほど日本では広く読まれていない。より多くの読者に彼の詩が持つ多様な側面を知り、味わって頂くため、本稿では、全訳を示し、作品の分析を行っていく。

### 1. “Funeral Rites”

試訳：

葬送儀礼

I  
僕は、大人の責任というものを背負った  
亡くなった親戚たちの  
棺を担ぐために一步を踏み出したときに。  
彼らは横たえられていた

薄汚れた部屋に、  
彼らのまぶたは濡れたように光り、  
パン種のような手は  
ロザリオの数珠が巻きつけられていた。

おしろいをつけた指の関節は  
皸もなく、爪は  
黒ずみ、手首は  
従順に合わせられていた。

紅藻色の経帷子、  
キルトをほどこしたサテンの棺。

僕は恭しくひざまづき  
全てに見とれた

蠟が溶け落ち、  
ろうそくを筋状につたうとき、  
炎はさまよう  
私の後ろを

さまよう女たちにあわせて。  
そして、いつも、部屋の隅には、  
棺のふたがあり、  
その釘山は飾られていた

小さなキラリと輝く十字架で。  
愛しい石鹸石のような顔、  
彼らのイグルーのような額にキスするだけで  
満足せねばならなかった

釘が打ち込まれ  
それぞれの葬儀の  
黒い氷河が  
押し出される前に。

## II

今、隣人が殺されたという  
知らせが届くたび  
僕たちはいつも通りのリズムで  
葬儀を行いたいと強く願う。

うねりながら  
鎧戸をおろした家々を通り過ぎる  
葬列のゆったりとした足取りを。  
僕は取り戻したい

ボインの大きな石室を、  
盃状穴がほどこされた石の下に  
埋葬所をこしらえて。<sup>3</sup>  
横丁やわき道から

プルプルとエンジン音を立てた家族連れの車が  
行列に入り込み、  
国全体が  
一万ものエンジンの

くぐもった連続音に合わせる。  
夢遊病にかかった女性たちは、  
置いてきぼりになり、  
誰もいなくなったキッチンを通って外に出る

僕たちの塚へ向けての  
ゆっくりとした勝利を思いながら。  
草に覆われた大通りを  
蛇のように静かに

行列が北の割れ目から  
その尾を引きずり出したとき、  
その頭はすでに  
巨石の戸口に入っている。

## III

彼らが石を  
その口に戻すと  
僕たちは再び北へと車を進める  
ストラングとカーリングフィヨルドを通り過ぎて、

今回ばかりは記憶を  
反芻することなく  
恨みの仲裁もうまくいくかもしれない、  
丘の下にいる者たちを思っ。

彼らは、暴力により亡くなったが  
復讐も遂げず、  
墓の中で  
美しく横たわるグンナルのように

安置されているのだ。  
言い伝えによると、彼は  
名誉についての歌を歌い  
石室の四隅では

四つの火が焚かれていた。  
石室は、彼が喜びに満ちた顔で  
月のほうを見たときに  
その扉が開かれたのだ。

“Funeral Rites”の第I部で描かれるのは、詩人が子ども時代に経験した近親者たちの葬儀の様子で、そこには、ゆったりとした時間が流れる。第1連は、以下のように始まる。

I shouldered a kind of manhood  
stepping in to lift the coffins  
of dead relations.

1行目の“manhood”は棺を背負うことで、葬儀において果たすようになった大人としての責任を示す。このことを“shouldered,” “stepping in,” “lift”という身体的な動

きにより表現し、想起される棺の重さがその責任の重さを表している。重々しい雰囲気が始まったこの詩は、続いて、亡くなった人の遺体が安置される様子を詳細に描く。“their eyelids glistening”、“their dough-white hands”とあるように、塗油され整えられた遺体のまぶたは濡れたように光り、パン種のように柔らかで粉を吹いたような手には、ロザリオの数珠が巻き付けられている。ここに使われる“shackle”という語は、「～に手かせをかける」という意味で、彼らが死から逃れられないこと、そして、その一方で信仰というもの、さらにはそれを共有する者たちの連帯により縛られつつ守られていることを暗示しているようだ。

第3連に移ると、おしろいを施され、皺すらみえない手の指の関節と、黒ずんだ爪の色の対比が遺体が今や生命観を失ったことを強調し、合わせられた手の手首は“obediently sloped”と表現されるように、従順な様で整えられている。続く第4連でも、紅藻色の経帷子やキルトをほどこした布で整えられた棺の様子が説明され、第4連の最終行に“I knelt courteously / admiring it all”とあるように、葬儀が、美しく整えられて棺に横たわる死者に対して、敬意を表する場であったことがわかる。ここまで、この詩には、ゆっくりとした静的な時間の中、この詩の語り手が死者を弔っている様子が描かれる。

第5連に入ると、一転して、動きがこの詩にもたらされる。死者に別れを告げた後、飾り釘が打ち込まれて、棺が蓋で閉じられ、“the black glacier”と表現される棺を覆う土によって棺が埋葬されるまでを描いた第I部の後半部分、第5連から第8連を引用したい。

as wax melted down  
and veined the candles,  
the flames hovering  
to the women hovering

behind me.  
And always, in a corner,  
The coffin lid,  
Its nail-heads dressed

with little gleaming crosses.  
Dear soapstone masks,  
kissing their igloo brows  
had to suffice

before the nails were sunk  
and the black glacier  
of each funeral  
pushed away.

部屋の四隅を照らしていたろうそくの蠟が筋をつけて垂れてきたことは、一定の時間が経過したことを示す。そして、ろうそくの炎は、語り手の後ろを動く女性たちの動きに合わせて漂う。彼女たちとろうそくの炎の動きは、死者と対照をなし、生命を表していると考えられるが、ここでろうそくの動きと女性たちの動きの両方を表すのに用いられる“hover”という語は、幻想的な雰囲気も醸しだし、生命のはかなさも同時に表している。一方、語り手は、せわしなく動く女性たちとろうそくの炎の間にあって動かない存在で、ゆっくりとした自分のペースを保ちながら、死者に別れのキスをして送り出す。葬儀とは、このように死者と向き合い、心を込めて送り出す、そのような場であったのだ。

しかしながら、第II部では、そのような弔いができない日常が描かれる。

Now as news comes in  
of each neighbourly murder  
we pine for ceremony,  
customary rhythms:

the temperate footsteps  
of a cortège, winding past  
each blinded home.

引用2行目の“each neighbouring murder”という表現は、“neighbouring murders”とは異なり、次々と近隣の人々の死の知らせが届く中、それぞれの死をひとつひとつ受け止める人々の気持ちを的確に表している。そして、“we pine for ceremony, / customary rhythms”とあるように、「僕たち」は、第I部に描かれるこれまで通りのリズムの葬儀を行うことを切望するのである。しかし、それが叶わない状況の中、「僕」は、ボインにある大きな石室を復活させ、皆が心をつにして死者たちを弔う葬儀を行いたいと願う。

“the great chambers of Boyne”とは、ダブリンの北およそ40kmのところにある、ニューグレンジ（Newgrange）のことである。これは、白い壁と頂上部分を覆う緑が美しい紀元前3200年頃に建設されたとされる新石器時代の遺跡で、内部で骨が発見されたことから、墓であったという説も有力だが、まだその建設の目的については議論が続いている。いずれにしても死者の弔いと関わる祭祀の場であったと考えられるこの遺跡を、詩人は亡くなった人々全ての象徴的な墓と見なす。そして、車に乗った人々は、わき道から次々と大通りに出てきて、途切れない車の列は大蛇のような葬列を作る。先に引用した第II部の第2連に描かれた、いつも通りの葬儀のリズムを表す、ゆったりとした葬列の足音（“the temperate footsteps / of a cortège”）は、ここでは、車の

くぐもったエンジン音に取って代わる。この一節は以下の通りである。

Out of side-streets and by-roads

purring family cars  
nose into line,  
the whole country tunes  
to the muffled drumming

of ten thousand engines.

この一万もの車のエンジン音に国全体は調子を合わせる。このエンジン音は、今回取り上げるもう一つの詩、“Casualty”でも使われる語で、葬送の音楽の代わりとしての重要な役割を密かに果たしていると考えられる。

この葬列に参加しそびれた者たちもいて、そんな女性たちは、キッチンの中を歩いて遅ればせながら外に出る。

Somnambulant women,  
left behind, move  
through emptied kitchens

imagining our slow triumph  
towards the mounds.

この一節にある“slow triumph”とは、身近な人たちの次々と訪れる死に対する弔いを「僕たち」が果たすこと、さらには、この詩のこの後の流れを念頭に置けば、国民が過去の抗争と恨みを消化して、先へと進めるように一つになることを指していると考えられる。また、引用最終行の、“toward the mounds”には、“move / through emptied kitchens”も、“our slow triumph / towards the mounds”もかかっていると読むことが可能で、参加しそびれた女性たちもキッチンから出て、ニューグレンジのほうへと歩み始めることを表す。

こうしてできた葬送の列は途切れることがなく、大蛇のようにゆっくりと進んでいき、先頭が墳墓の戸口に達する頃、その尾は“the Gap of the North”から引きずり出される。

Quiet as a serpent  
in its grassy boulevard,

the procession drags its tail  
out of the Gap of the North  
as its head already enters  
the megalithic doorway.

“the Gap of the North”とは、北アイルランドとアイルランド共和国の国境付近にある、氷河期に形成された谷で、ニューグレンジとは直線距離でおよそ50 km離れている。棺を覆う土を「黒き氷河」と表現して閉じた第I部に続き、第II部の終わりにも、さらには、続く第III部でも、“Strang and Carling fjords”という地名によって、氷河を想起させる表現が登場する。

最後の第III部を見ていきたい。葬儀を終えて、戸口の石が再び閉じられると、葬列をなす車は再び、北へと向かい始める。ストラング・フィヨルドとカーリング・フィヨルドを通り過ぎると過去を思い出すことによって起こる恨みや確執も鎮められる。ここで、Njals Sagaに登場する10世紀のアイスランドの族長、グンナル・ハマンドーソン (Gunnar Hamundarson) が登場する。グンナルは、武術に優れた戦士であったが、戦いを好まず心優しい人物であったとされ、彼は暴力により命を落とすことになったものの、その親族が復讐することもなかったとされる。この詩は、グンナルが、穏やかに名誉についての歌を歌い、その墓の扉が開かれると喜びに満ちた顔を月の方へ向ける様を描くことで閉じる。この最終部に込められたのは、暴力と復讐の連鎖を断ち、グンナルが見つめる方向に、暗闇ではあるが、その中に穏やかに輝く月があるように、開かれた未来へと向かいたいという願いである。この理想的過ぎるようにも思える願いは、その後のアイルランド紛争の状況を考えて、実現することはなかった。

また、第II部で、車の葬列は蛇に喩えられていることにも目を向けたい。アイルランドでは、聖パトリックがアイルランドから蛇を追い出したと言われているが、キリスト教では邪悪な存在と見なされる蛇に、葬列をなぞらえることで、イングランドによる支配以前のアイルランドに立ち返ることで、争いと復讐の連鎖を断ち切りたいという願いもこの詩には込められていることが読み取れる。

## 2. “Casualty”

試訳：

犠牲者

I  
彼は一人で飲んでいたので  
ガサガサした親指を  
高い棚のほうへ上げ、  
声を出すこともなく  
黒スグリ割りのラムのおかわり  
を注文したものであった、  
また、視線を上げ

栓を抜く  
巧みなジェスチャーで  
ちょっと一杯を注文したものだ。た  
看板になると  
防水ズボンと庇つきの帽子を身につけ  
小雨の降る闇へ消えていったものだった、  
失業手当をもらっている一家の大黒柱  
だが仕事には向いていた。  
僕は彼の仕草の全てが好きだった、  
頼もしいが、ずる賢過ぎるところ、  
無表情に横から忍び寄る如才なさ  
漁師らしいすばしこい眼  
そして背を向けていてもしっかりと見張っている背中も。

僕の人生のもう一つの面が  
彼には謎だった。  
ときおり彼は止まり木に腰掛けて、  
ナイフでしきりに  
かみたばこを削りながら  
目も合わせずに、  
肩をすくめた後一杯飲んで  
詩について触れたものだ。  
僕たちはそれぞれ一人で来ていて、  
いつも遠慮がちで  
そして、自慢話などしなかった、  
僕はなんとかごまかして  
話題をうなぎとか  
荷馬車とかの話に  
あるいは暫定政府の話に切り替えたものだ。

でも、僕のぎこちない取り繕いも  
彼の背中はずっと見ていたのだ。  
彼は粉々にぶっ飛ばされた  
他の者たちは従っていたのに、  
十三人の男たちがデリーで  
射殺された後も三晩、  
外出禁止令の中に飲みに出かけて。  
落下傘部隊13、  
ボグサイド0 と壁は語った。あの水曜日、  
皆は  
息をひそめ震えていた。

II  
寒い日だった  
いたたまれないほど静かで、  
白衣と法衣は風に吹かれていた。  
雨が打ちつけ、花が積まれた棺が  
一つそしてまた一つと  
混み合った聖堂のドアから

ゆったりとした水の流りに浮かぶ花のように  
流れ出るように見えた。  
合同の葬儀場からは  
巻き布が解かれるように人々が  
広がったり、まとまったりしながら出てきた  
僕たちがリングの中の兄弟のように  
励まされ、団結するまで。

でも、家族も、彼を  
家にとどめることができなかった  
どんなに電話で脅されても、  
どんなに甲旗がはためいても。  
僕には彼が振り返る様子が目に浮かぶ  
爆破が起こったとされる場所で、  
まだ彼だとわかる顔には  
恐怖と後悔が入り交じっている、  
彼の必死だが怖じ気づかない凝視が  
閃光の中で  
光を失った。

彼は何マイルも出かけていたのだ  
集った人たちのたばこの煙の中  
グラスの間を漂う  
ぼやけた網とささやき、  
温かく照らされた場所という  
ルアーに向かって  
夜な夜な、自然に  
泳いでいく魚のように飲んでいったのだ。  
そんなに彼は悪かったのか  
あの晩、  
仲間の連累を破ったときに。  
「ところで、あんたは  
学があるらしいな」  
僕には彼が言うのが聞こえる「俺に  
この正解を教えてくれないか。」と。

III  
僕は彼の葬儀に行き損なった、  
静かに歩く人たち  
道路脇で話す人たちは  
彼の家的小道から  
霊柩車のエンジンが  
恭しくプルプルいう音のほうへ群れをなして行く・・・  
もたもたしているエンジンの  
いつもの  
ゆっくりとした慰めに  
あわせて彼らはゆっくりと進む、  
釣り糸が持ち上げられ、こぶして  
たぐり寄せられると、冷たい陽光が

水の上に現れ、陸は  
霧のもと姿を現した。あの朝、  
彼がボートに乗せてくれたとき、  
スクリューは小さな渦を巻き、  
凧いだ海を白くした、  
僕は彼と一緒に自由を味わった。  
朝早く船出し、海の底から  
着実に網を引き上げ、  
獲物に文句をつけて、微笑む  
調子が出てくると  
ゆっくりと何マイルも漕ぎ出し、  
君の本領へ、  
どこか、ずっと向こうの、その先の…

夜明けを嗅ぎつける亡霊よ  
真夜中の雨の中をとぼとぼ行く人よ  
今一度問いかけてくれ。

この詩の冒頭では、まるでハードボイルド小説に登場する人物のような、渋いジェスチャーのみで飲み物を注文するパブの常連客の男性が描かれる。しかし、第1連の後半になると、彼は一家の大黒柱でありながら、失業手当を受けていることが明かされる。しかし、実際のところ彼は、仕事には向いていて、漁師らしいすばしこい眼をもち、如才ない人物であったこともわかる。彼の振る舞いの全てを詩人は愛していた。実は、彼は実在の人物で、ヒーニーの義理の父が経営したパブの常連だったルイス・オニール (Louis O'Neill) のことをうたった詩である。詩の語り手“ I ”と詩人ヒーニー、そして、詩の中の登場人物を実在の人物と安易に同一視することは避けなければならないが、この詩は、ヒーニーの多くの詩と同様に、個人の経験とそれに際して彼が抱いた思いに深く根ざしている。そのため、ここでは、この詩を論じる際に“ I ”を詩人として言及する。

第2連で注目したいのは、詩人と彼との絶妙な距離感である。彼にとって、ヒーニーの、パブの客であるという以外の側面、すなわち、詩人としての側面は謎であった。そして、彼が詩について言及し始めるとヒーニーは別の話に話題を切り替えてそのことに話が向かないように取り繕った。

We would be on our own  
And, always politic  
And Shy of condescension.

とあるように、それぞれ一人で来ていた彼とヒーニーは、つかず離れずといった適度な距離を保っていて、自慢話などは避けていた。そんな彼が、十三人がデリーで銃殺

された後も、三晩、いつも通りに飲みに出かけていて爆破によって命を落としたのだ。それは、人々は、亡くなった人たちを弔って合同葬を行っていたような日であった。雨の中、花で飾られた棺が、ゆっくりとした小川を流れる花のように聖堂のドアから次々と出て来くる。集った人たちは、葬儀が終わるとおくるみ (“swaddling band”) が “unroll” されるようにその場を離れるものの、恐怖や怒りによって身を寄せ合い、結束を強めていく様が以下の一節には描かれている。

The common funeral  
Unrolled its swaddling band,  
Lapping, tightening  
Till we were braced and bound  
Like brothers in a ring.

引用2行目と4行目の末尾の “band” と “bound”、3行目と5行目末尾の “tightening” と “ring” は、人々の結束を強調している。一方、彼は、家族や仲間の忠告や脅しにも関わらず、ルアーに魚がおびき寄せられるのと同様に、温かく照らされた酒場に、「夜な夜な、自然に (“Nightly, naturally”)」出かけていったのだ。これは、当時の状況を考えれば慎むべきことだったかもしれない。しかしながら、詩人は、“How culpable was he / That last night when he broke / Our tribe’s complicity?” と問う。もともと彼は一人で行動することを好み、一人で酒場を訪れ、一人で漁をしていた。その一方で、客で混み合った酒場の雰囲気好み、そこに心のおもむくままに向かっていたこともわかる。その場に居合わせた者との、結束する訳ではなく、緩やかで自然なつながりを感じる心地よい関係、これこそが、彼が自然に好み、詩人も理想とする個々の人間が他者と持つ関係であったことがこの詩から読み取れる。

ここで、“Funeral Rites” において描かれた、親類の、そして、国民全体としての葬儀のあり方を振り返ってみたい。親類の葬儀の際も、動き回る女性たちへの言及があり、自分以外の参列者の存在は当然のこととして想定されるものの、死者と「僕」との関係は1対1の関係で、集団として死者を弔う様子というものは、あえて前面には押し出されていない。また、亡くなった人たちを合同で弔うため、ボインの大石室に向かう車の葬列にしても、自発的に次々と人々はその列に加わっているように描かれている。車で葬列に加わった人々も、夢遊病の女性たちも、詩中の言葉で明示はされないが、彼らが共有している何かに動かされているのだ。その何かとは、人間の自然な感情に従った結果生まれてくるこの緩やかな結びつき、連帯感こそが、当時のアイルランドに、やむを得ず広がっていた強すぎる結束に対するアンチテーゼとして提示されていると考えられる。

詩のタイトル“Casualty”が示すように、「彼」は、文字通り爆破による犠牲者である。しかし、“How culpable was he / That last night when he broke / Our tribe’s complicity?”という問いが投げかけるものに意識を向ければ、彼の自然な振る舞いが、仲間の掟に反するものになってしまうような状況こそが異常であり、彼はそのような状況の犠牲者でもあったとすることができる。

第 III 部の冒頭で明かされるように、ヒーニーは彼の葬式に行き損なってしまった。詩人は、彼の葬儀が普通通りのゆったりとしたペースで進むものであったと想像した後、彼の船に乗って釣りに出かけた一日を思い出す。

That morning  
When he took me in his boat,  
The screw purling, turning  
Indolent fathoms white,  
I tasted freedom with him.  
To get out early, haul  
Steadily off the bottom,  
Dispraise the catch, and smile  
As you find a rhythm  
Working you, slow mile by mile,  
Into your proper haunt  
Somewhere, well out, beyond . . .<sup>4</sup>

ここには、船のエンジンが白くかき乱す穏やかな海が広がっており、詩人は彼と一緒に「自由」というものを味わう。生き生きと手際よく漁をし、微笑む彼を思い出す中、詩人の意識は、ゆっくりとはるか向こうにある彼のいるべき場所（“proper haunt”）へと向かう。そして、この詩は以下の三行で結ぶ。

Dawn-sniffing revenant,  
Plodder through midnight rain,  
Question me again.

それまでの美しい澄み切った朝の光景から一転して、この三行にある、彼への呼びかけによって、読者も現実に戻される。彼は今や亡くなり、パブが閉まった後、とぼとぼと夜中の雨の中に消えていく彼の亡霊は、かつての、普段どおりの彼そのものである。そんな彼に詩人は今一度自分に問いかけてくれと言う。そこには、彼の人生が、投げかける問いに答えを見つける努力を続けたいという意思が感じられる。

今回取り上げた 2 編の詩は、血の日曜日事件に触発されて書かれたものだが、創作年には、“Funeral Rites”は1975年発表の*North*に収録されたのに対し、“Casualty”は、4年後に出版された*Field Work*に収録されている。この間も混迷を深めた今後、今回取り上げた詩がそれぞれの詩集において占める位置と持ちうる意味について考察を進めていきたい。

## 参考文献

- Heaney, Seamus. *Opened Ground*. Farrar, Straus and Giroux, 1998.
- Russell, Richard Rankin. *Seamus Heaney: An Introduction*. Edinburgh UP, 2016.
- ヴェンドラー、ヘレン。『シユーマス・ヒーニー：アイルランドの国民的詩人』、村形明子訳、アルファ・ベータブックス、2016年。

<sup>1</sup> ヴェンドラー、70。

<sup>2</sup> Wallenfeldt, Jeff. “the Troubles”. *Encyclopedia Britannica*, 24 Aug. 2022. <https://www.britannica.com/event/The-Troubles-Northern-Ireland-history>. Accessed 23 September 2022.

<sup>3</sup> “the great chambers of Boyne”とは、アイルランド共和国のボイン川のほとりにある先史時代の遺跡ニュー・グレンジ (Newgrange) を指す。ニュー・グレンジ建設の目的については諸説あるが、この詩の中でも、象徴的な共同の墓としての役割を与えられているように、墓であったという説が有力である。直径は76メートル、高さは12メートルの巨大な墳墓の入り口には、渦巻き模様を彫り込んだ石の扉がある。

<sup>4</sup> この海の光景は、後のヒーニーの作品“Seeing Things”と共通するものがあるように思われる。参考のため、その試訳をここに提示する。

「ものを見る (Seeing Things)」

ある日曜の朝のイニシュボーフィン  
太陽の光、泥炭の煙、カモメ、船台、ディーゼルエンジン。  
僕たちは、一人一人手を引かれ  
ボートに乗り込むが、そのたびにボートは横滑りし、  
ひやっとするほど揺れる。僕たちは、2、3人ずつ

詰めて短いベンチに座った、  
従順に、新たに身を寄せ合い、船頭以外  
誰も話さなかった、船縁が沈み、  
水が今にも入ってきそうに思えたので。  
海はとても穏やかだったが、それでも  
エンジンが始動し、船頭が  
舵柄に手を伸ばしてバランスを取るために身を揺さぶると  
僕は船自体の滑りやすさと重さに  
うろたえた。僕たちに保証されているもの——  
素早い反応、浮力、泳ぎ——が  
僕を苦しめた。ずっと  
深く、静かで、水の中まで見通せるところを  
なめらかに進んでいくと  
まるで僕が空中を、高く、進んでいく別のボートから  
見ているようで、朝の中へこぎ出していくことは  
そして、無帽でうなだれる、数を定められた頭を  
無駄に愛しく思うことも危なっかしいことだとわかる。

「明澄」 乾いた目のようなこのラテン語の言葉は  
水を刻みつけた石にぴったりだ。  
そこでは、イエスが、膝下まで水につかって立ち、

洗礼者ヨハネがさらに水を  
頭の上に注いでいる。これら全てはまばゆい光の中、  
大聖堂のファサードに刻まれている。硬くて細く、  
曲がりくねった線は  
流れる川を表している。線の間には  
小さく風変わりな魚たちが泳いでいる。他には何もない。  
だが、全てが見えている中、  
その石は、見えないものと生きていた。  
水草、急いで流れ去る浮き上がった砂粒、  
陰のような、陰もない流れそのものと。  
午後中、熱気が石段で揺らめき、  
僕たちが目までつかっていた（／必死にその中に立っていた）大  
気は  
命自体を表すヒエログリフのジグザグのように揺らめいていた。

昔々、おぼれそうになった父が  
庭に歩いてやってきた。彼は川の土手の畑の  
ジャガイモに水やりに行っていたのだが、  
僕を連れて行こうとはしなかった。馬の  
いも撒き機が大きすぎるし、新しいから、青石が

目に入って僕がやけどするから、馬が新米で、僕が  
馬を怖がらせるかもしれないからなどと言って。僕は、石を  
小屋の屋根の鳥に向けて投げた、なにはともあれ  
石のからからいう音を聞いたかったのだ。  
でも、父が帰ってきたとき、僕は家の中にいて、  
窓から父を見た、落ち着いた目をして、  
怖じ気づいて、妙で、帽子も被っておらず、  
足取りは心許なく、死に近い雰囲気が漂っていた。  
父が、土手で方向転換をしたとき、  
馬が言うことを聞かず、前足で立ち、まき散らした、  
荷車とイモ撒き機も、なにもかもバランスを崩して、  
それで、装備は全て飲み込まれてしまった、  
深い渦に、蹄、鎖、轆（ながえ）、車輪も、本体も  
船の索具も、全て、世界から転げ落ちていった。  
そして、帽子は楽しげに流れていっていた  
静かな水域に。その午後、  
僕は父を間近で見たけれども、彼はこちらに  
川から出てきたままの濡れた足跡をつけながらやってきた。  
そして、僕たちの間には、  
これから先、幸せにやっていけないことは何もなかったとさ。